読み物

Fast life, Slow life

村越真のオリエンテーリング日誌

村越 真

オリエンテーリングにアウトドア、研究に公務と、あらゆることがまとわりついて、久しぶりにハイパーな年末・年始となった。
センター入試も終えた１月下旬にはかなり疲れ気味。この性格は死ぬまで変わらないだろうと、つくづく感じる。

▲はじめての雪山登りは、期待した吹雪もなく、せっかく買ったアイゼンを使うこともなく終わった。寒さのなか、山の登る人の気持ちが少しだけ分かったと同時に、自分自身がまだまだ修行中の身であることを感じた。長岡さんとは、今度一緒にコラボ研修会しましょうといって別れた。

■いつかナヴィゲーションマスターに・・・

12 月 1 日

東京で危険認知関係の研究会に出席した後、岡崎に向かった。ここで一泊して、翌朝のバスで下山大会に向かった。エリート権がないと思いこんでいた自分は M21A に申し込み、優勝して全日本の E 権を取るつもりでいた。ところが、実は公認大会のエリート権を持っている一方で、この大会の M21A で勝っても全日本のエリートには出場できない。そんなこと全く知らなかったよ。

おまけに翌週の埼玉大会はそのことに気づいてエリートに申し込んだものの、外部の講習会のために出場不可。よく調べない自分が悪いのだが、踏んだり蹴ったりである。タイムはｋｍあたり 10 分。お世辞にもいいタイムとは言えないが、エリートとは大きな差はない。レース中はけっこう息苦しいが、まだまだやれそうである。そのまま富山に向かった。

12 月 3 日

立山の麓で、文部科学省登山研修所冬山研修会安全検討会の初めての委員会が開かれた。2000 年 3 月、同研修所の冬山研修において雪庇が崩落し、2 名の学生が亡くなった。その後民事裁判で文科省は一審敗訴後、遺族と和解したが、その条件の一つがこの安全検討会の開催であった。冬山には全くの素人だが、雪庇事故を防ぐためには、正確に稜線をたどる必要がある。ナヴィゲーション方法についての意見を求められているだろうことは容易に推測できた。

当時、雪庇については先端の踏み抜きの危険性は高いことが登山者に共有されていたが、先端から 10m ほど離れれば大丈夫というのが一般的認識だった。ところが、報告書によると、この時の雪庇は常識を外れる 40m のものであり、先端から 17m のところが崩壊した。GPS による 10m 精度のナヴィゲーションでは、雪庇崩落から逃れることはできない。

会議は黙祷に始まり、遺族の言葉に続く重いものだったが、その状況でどのようなナヴィゲーションが可能だったのだろうか。ナヴィゲーション・マスターを自負する自分に、重い宿題が残された。いつか本当のナヴィゲーションマスターになれるのだろうか。

12 月 8 日

午前中は大学の公開講座で、読図講習を行なった。ほとんど広報をしなかったのに、定員の 30 近く集まったことに担当の事務の人が驚いていた。この分野はまだまだ供給不足なのだ。

午後は JOA で委員長会議を行い、夕方の房総特急で富浦に向かった。翌日午前は富浦にある大房岬少年自然の家でオリエンテーリングの講習会。この

▲大房岬での講習（左）と大学の公開講座受講のボーイスカウトメンバー（右）

施設は県立だが、指定管理者制度をしいている。指定管理者は民間なので、当然県よりも経営感覚が鋭い。この制度は、野外教育施設に新しいスタイルのオリエンテーリングを定着させる絶好の機会なのである。講習づけの週末で、さすがに帰りはくたくただ。

■はじめての冬山登り

12 月 15 日

安全検討会の委員としての自分に冬山の知識は期待されていないが、会議の重さを考えると、その経験なしに何かを語ることは傲慢に思える。ナヴィゲーションマスターを目指す以上、冬山でのナヴィゲーションも、いつかは自力で体験しなければならない。冬山にいくことにした。

もちろん自分一人でいくような無謀なまねはしない。登山研修所の指導員研修で紹介のパンフレットをもらい、冬山を始める時には是非世話になろうと思っていた国際ガイドの長岡さんに連絡を取ると、ガイド仲間の値段でやりますから、是非来てくださいという嬉しい返事。通常の受講料２万円を半額にしてもらった。

場所は浅間山の外輪山の黒斑山。長岡さんが軽井沢でピックアップしてくれた。他にも３人の受講生と一緒だ。初の雪上キャンプにわくわくする。雪の中にテントを張って、楽しく鍋を囲む。

翌朝は曇っていたが、登っているうちに、天気は回復に向かった。自分は仕事のつもりで登っている。そうじゃない人が雪山なんかになんで登るのだろう、そう思っていたが、実際登ってみると、その答えが少し見えた気がする。

▲冬山の師匠、長岡さんと。モンブランでは、他の国のガイドを先導して霧の中降りてくる、一流の国際ガイドだ。

12 月 20 日

午後から JOA で総務会。５時間に渡るハードな会議でぐったり。こういう時に胸の苦しさを感じるのだから、やはりストレスなのだろう。うつも含めて自分の状態をべらべらしゃべっていると、「実は僕も／私も精神安定剤飲んでいるんです」という同僚には、しばしば出会う。よほど楽天的な性格の持ち主でなければ、仕事に邁進すれば、こういう心身の状態になることは不可避なのだろう。

翌 21 日は、表参道のマックで朝食をとった後、スポンサーの可能性のある会社に訪問。その後岸記念体育会館によって、日本山岳協会、日本五輪委員会を訪ねて、コネづくりに励む。午後は用賀のモスバーガーで昼食をとって、えい出版の山本さんを訪ねる。今執筆中の本の打ち合わせ、JOA 協賛のお願い、ロゲイニングの広報などの話など、次から次へと話したいことが出てくる。

時間があったので、ついでに渋谷のゴールドウィンに田口さんを訪ねる。田口さんのところではクライミングの若き全日本チャンピオンに会う。その後は奥武蔵での読図山行のため飯能にいき、R 嬢とデート。

■読図本、至福と至難の時

12 月 22 日

えい出版で書いている本のため、鹿島田真理子さんにお願いして「読図初心者」の OL 登山委員会の人を集めてもらう。この「OL」はもちろんオフィスレディーである。OL が５人も集まると、はなやかの一言に尽きる。６時間一緒に歩き、初心者の読図のくせがつかめた。

▲OL 登山委員会のメンバーと奥武蔵で読図山行。彼女らの写真を随所にイメージ写真でちりばめたら、ミセス雑誌のような華やかさだ。

12 月 23 日

午前中は読図本執筆し、午後、日本平を抜けて大学まで走り、いきつけのスポーツショップでクリスマスの買い物して帰る。24 日も 25 日も読図本執筆を続ける。仕事ははかどるがやや焦燥感が出る。１冊のまともなテキストを３ヶ月で仕上げようというのだから、無理もない。その後 2 月 1 週まで、入試委員長という緊張を強いられる役職の中での執筆は、かなり精神を痛めつけることになる。

12 月 27 日

本当に久しぶりのダブルヘッダーデート。昼は昨年修了した修士課程の元学生と、夜は N 嬢とトレーニングジムデート。まともな運動はふた月ぶりというのに、こちらがランニングマシンのスピードを上げると、向こうも負けずに上げてくるのは相変わらずだ。うちに連れてきて夕食食べて、山岳耐久の DVD 見せたら、「楽しそう！」体調悪いながらそう言う彼女の言葉に逆に力づけられる。

12 月 29 日

N 嬢とランニングデートを試みるも、朝からあった胸痛は走ると明らかな違和感になり、ジョグペースでも HR が 150 近くにあがってしまった。その後一緒にゆっくりジョグをしたが、日本平の最後ではとうとう歩かずには居られない気分になった。何が痛いという訳ではないのに。帰宅後も胸の違和感が続く。

▲N 嬢と日本平ランニングデート。今度は、「夜の日本平をヘッドライトを点けて走ろう！」と誘うと、「わー楽しそう！」

2008 年 1 月 1 日

ゆっくり寝坊して、のんびりとすごす一日。山に走りに行きたい衝動はあったが、無理はしないことにした。夕方 13km 70 分 jog。途中少し胸に違和感があったが、後半は黒目川沿いに気持ちよく走り切れた。HR 概ね 130-150 くらい。

1 月 2 日

ちゃこの実家の新座から自分の実家の品川まで、移動を兼ねて走る。数年前は全部走ったが、今日はその気力はなく、結局新宿までの 20km で終了。最初の数 km は低血糖気味、後半 3km は脚の痛み。まだまだ鍛錬が足りない。

1月5日

３回目になるMnop主催のユースキャンプを富士で開催した。競技的な運営は若手に任せ、今回は事務方に徹する。疲れのせいか朝から立ちくらみ気味だが、トレーニングの調子はいい。久しぶりに追い込むトレーニングを森でした。翌日は村山口の再調査。あちこちにできた伐採道が痛々しい。

▲３回目を迎えたユースキャンプ。今年は70名の参加者が集まった。自分を高めたいという場への欲求は高い。

▲いつ聞いても面白いカッシーの講義。この日も、世界のエリートに対するオタクぶりを遺憾なく発揮してくれた。

1月10日

２回目の安全検討委員会。朝からやや胸痛。明らかに自律神経失調気味のようだ。朝食は品川のカフェのビュフェでのんびりととってみる。重い会議と大学での会議を終えたあとのゆっくりしたジョグが楽しい。この気分は久しぶりでよかった。家に帰ってからも猛烈に眠い。

1月12日

休みだが、ウィークデーに出かけることが多かったこの週は、休日出勤しないと仕事が追いつかない。提出された卒論を読み切って修正箇所にコメントをつける。自分の論文も仕上げて、なんとかノルマにおいついた感じ。

1月13日

久しぶりに早起きして、地図調査へ。途中雨が降ってきた。その中地図調査していたら、普通ブルーになるよな。雨は中途半端で止めるふんぎりも着かないまま、結局７時間調査してかなりはかどる。よくがんばった（「岳」風に）

1月17日

宮内に大学に来てもらい、読図本の彼女の原稿のチェックと、図版作成を手伝ってもらう。提出した図版の地図原図は300dpiでは解像度不足でダメだしをくらった。この作業に思いのほか時間がかかり、全体として執筆がちっともはかどらなかった。

もともと４ヶ月くらいで新しいアウトドアシリーズをスタートさせたい山本さんへのおつきあいの意味もあって承諾した今回の読図本だが、５年間の初心者向け講習会の開催は伊達ではなかった。等高線が読めないっていうのはどういうことか、逆に読める人はどこに注目しているのか、現在地把握にしてもしかりだ。前に本を書いた時には当たり前のように流してしまった部分が、いくらでも詳細に書ける。手を抜くつもりはもとよりなかったが、思いもよらずいい本ができるんではないだろうか。そういう期待を抱きながらの執筆は楽しい作業であった。

そして、構想・執筆と終わり、読図本も最後の詰めの作業に入る。本の執筆を後悔する瞬間である。

■センター入試はイベント気分

1月18日

明日はセンター入試。この日を期してスキンヘッドにしようという計画を実行に移す。当日の朝教育学部の教官がそろったところで、入試委員長は毎年挨拶をする。「緊張で髪の毛が全部抜けてしまいました。もう丸める頭もないので皆さん、ミスのないようにお願いします。」この一言を言うために。大学教員は、こういうジョークに笑ってくれるいい人たちである。

小さなトラブルは次々と発生するが、数々の国際大会を運営している僕からすれば、こういう小さな被害のないトラブルが起こっている時の方がむしろ安心できる。それは運営者がトラブルへの目を光らせているということであり、トラブルシューティングをしようという意欲を持っているからこそである。

もっともトラブルが懸念されるリスニングも終わり、二日目に入ると緊張感を楽しむ余裕も出てきた。それは先生方にも伝染したようだった。このあたりはもうオリエンテーリング大会運営気分であった。二日間、神経を張りつめ、疲れはしたが充実感が残ったイベントも世界選手権以来だ。最後の「お疲れ様でした」の挨拶に拍手が起こったのも、記憶では初めてだ。終了後、軽く走る。

1月21日

センター入試の疲れを完全に抜かないまま、出かけることの多い週に突入した。月曜日はJOAに行き予算編成。最終の新幹線で帰宅。翌日は朝霧で県教委から委嘱された委員会の会合。それをいいことに宮内宅を尋ねて、読図本の執筆チェック。アドベンチャーレースで修羅場をくぐった宮内なら、どうあってもついてくるだろう。遠慮なく赤を入れ、ダメだしをする。

1月23日

好日山荘静岡呉服町店での読図講習会、春のシリーズを始める。19時からの１時間の講習だが、３回のシリーズは早くも定員いっぱいである。

整置をなかなか理解してくれない受講者がいた。講習後も残って、店長となじみの参加者とで、あれこれ教えた。彼女は全く地図を読んだことがなく、上が北だということすら分かっていなかった。普段は自転車をしていて、トレイルランもちょっとやる。いずれはアドベンチャーレースもしたいので、地図を覚えたい。でも関東では講習会を見つけられず、川崎から１時間のためにやってきたという。その熱意に感動するとともに、それに応えることができたかどうかを自問した。

1月27日

個人的に頼まれた読図講習会のための下見を、MTB＋ランで出かけた。ランでアップを登ると意識が低下する。貧血気味なのかもしれない。帰りは低血糖で、我慢できずサークルKで買い食い。

▲静岡の万観峰（まんかんほう）に登ると、コンパスを使って山座を同定している登山者にであった。珍しく思って声を掛けると、12月の講習に参加した人だった。指導者冥利につきる瞬間である

（村越 真）